

大腸がんは大腸内視鏡検査

大腸がんの罹患者は増えています

日本人が最も多くかかっているがんは大腸がんで、女性のがん死亡の第一位は大腸がんです。成人の11～13人に1人がかかると推測されています。大腸がんになると便秘や下痢、血便や腹痛、便が細くなるなどの自覚症状が現れる場合があります。また血液検査で貧血を指摘されることもあります。しかしこれらは大腸がんが進行してからの症状で、早期がんではほとんどの場合で症状がありません。

大腸がんを引き起こしやすい原因として、食生活の欧米化、肥満、アルコールの取り過ぎなどが考えられています。高齢になると発症しやすく、遺伝性的の場合もあります。胃がんはピロリ菌感染が原因と分かっていますが、大腸がんの原因はまだ分かっていません。大腸がんを100%予防することはできません。

大腸がんは他のがんと比べて治る可能性の高いがんで、決して怖い病気ではありません。それにもかかわらず、大腸がんが亡くなる方が多いのはなぜでしょうか。それは適切に検査を受けていないためです。いまだに大腸内視鏡検査は苦しいなどの理由で敬遠されることが多いと思われます。

大腸がんでも便潜血検査が陰性となることがあります

便に血が混じっていないかどうかを調べる便潜血検査を横浜市内在住の方で40歳以上の人は年に一回、大腸がん検診として無料で受けることができます。2回のうち1回でも陽性になれば大腸内視鏡検査を受けましょう。

さて便潜血検査で陽性になったにもかかわらず内視鏡検査を受けるのが嫌でもう一度便潜血検査をする場合がありますが、これは大腸がんを見逃す可能性があるため絶対に止めてください。もし再検査で陰性になっても安心はできません。大腸がんがあっても便潜血検査が必ず陽性になるわけではないからです。

もし血便が出たとしても必ず大腸がんが見つかるわけではありません

また便潜血検査が陽性になったときに痔だろうと考えたり、大腸がんが見つかるのが怖かったりして、内視鏡検査を避けてしまうこともあるようです。血便をきたす疾患として大腸がんの他にも次のような疾患によく遭遇します。

虚血性腸炎：強い腹痛のあとに下痢、下血をきたす疾患で、便秘の人に多くみられます。

憩室出血：腹痛がなく突然下血します。緊急内視鏡検査で止血できたり自然に血が止まったりする場合がありますが、出血量が多いと入院が必要になります。

潰瘍性大腸炎：頻回の下痢に粘血便を伴います。発熱や腹痛を伴うこともあります。

感染性腸炎：発熱、腹痛、水様の下痢、時に血便を伴うことがあります。イボ痔・切れ痔：痔があっても大腸がんを否定することはできません。

大腸内視鏡検査について

最近は優れた内視鏡技術を持つ医師が増えています。また鎮静剤を適切に使用することでほとんどの人は楽に検査を受けることができます。病変が見つかったときにその場でポリープを切除できることが最大の利点です。腺腫といわれる良性の腫瘍性ポリープを切除することで大腸がんの死亡率を減少できることがほぼ確実です。また内視鏡検査を一度受けると大腸がんの死亡率が下がることも分かっていますし、毎年受ける必要はなく三年間隔くらいで検査を受ければ良いと推奨されています。大腸がんは増えていますが早期発見できれば命を脅かされることはなく、内視鏡治療で完治できる可能性のある病気です。症状がなくても40歳を過ぎたら一度大腸内視鏡検査を受けることが大切です。